

## 今、この時を生ききる

上 廣 哲 治

「技術立国」を標榜し、モノづくりを誇ってきた日本の科学技術力が衰退していると報じた新聞記事を読みました。その国の科学技術の力をはかる目安となるのが、発表された有力な論文の数です。記事によると、基礎研究の論文数は二〇〇六年と一六年を比較すると、アメリカは一七パーセント、中国は五八〇パーセント、ドイツは五二パーセント、韓国は二九〇パーセントも増加したといえます。ところが日本だけは二パーセント減っているのです。しかも、いきなり減ったのではなく、二〇〇〇年頃をピークに少しずつ減少しているのです。世界的に権威のある科学学術誌、『ネイチャー』も、その特別版で日本の科学技術研究の衰退を取り上げ、将来を憂えています。

日本で一体何が起きているのでしょうか。二〇〇〇年から二〇一六年までの十七年間に物理学賞や化学賞、生理学・医学賞の科学研究部門で、アメリカ国籍を取得している人も含めて十七人もノーベル賞受賞者を輩出し、世界中から高い評価を得ている日本の科学研究がなぜ衰退しつつあるのでしょうか。原因の一つとして考えられるのは、大学が独立法人化されてから研究に投資する予算が減ってきたこ

とです。その結果、限られた予算で研究をバックアップしなければならぬので、大学側もすぐに成果が得られて、利益に結びつく研究には予算を割けますが、なかなか成果の出ない地味な基礎研究にはお金を出せないというのです。短期間に成果を上げられる研究はバックアップするが、時間がかかるようだとそれをしていません。こうした環境が若い研究者の情熱を奪い、それが科学技術研究の衰退を招いているのです。つまり、結果を求めるあまり基本を蔑ろにしたことが、かえって成果を出しにくくしているということではないでしょうか。

本年『年頭之辞』で、ノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典先生を題材に取り上げました。理由が先生の言葉を聞き、研究に寄せる姿勢に深く共感したからです。

「これが役に立つかどうかはわかりません。でも、自分が面白いと思つたので、夢中で研究したのです」「研究が面白いと思えることが、サイエンスではもっとも大事なことです」

大隅先生は、自分の研究テーマが生命現象の謎を解き明かす基本原理にかかわるものであることを直感的に理解していました。しかしながら、それがノーベル賞につながることは少しも考えていませんでした。ただ生命の不思議を解き明かそうと夢中で研究しつづけたのです。先生の発見した現象は、すべての生物に共通する原理なので、今後さまざまな分野に応用されるでしょう。目立たない地道な基礎研究が、大きな発見につながったのです。

私たちの倫理実践にしても同じことです。早く結果を出そうとするあまり、かえって基本を見失う傾向があるように感じております。結果を求めることが悪いとは思いません。目標を設定して、そこに向かって実践するのは当然のことですし、立てた目標は必達しなければなりません。しかし、過度に目

標を意識すると、基本を見失って倫理実践そのものが歪んでしまうことがあるのです。

ボクシングの村田諒太選手が世界王座をかけ、王者アツサン・エンダム選手に挑戦するまでの姿を記録したドキュメンタリー番組がありました。ロンドン五輪の金メダリストからプロへ転向した村田選手は、世界チャンピオンになって当たり前というプレッシャーと常に闘いつづけてきました。そのプレッシャーを撥ね返して五月の世界王座決定戦でエンダム選手と戦って善戦したのですが、実戦の経験が不足していたのか、優勢に見えたものの、判定負けを喫してしまったのです。テレビや新聞は、明らかに村田選手が勝っていた、採点は間違いではないかと報じました。多くの人が採点に疑問を抱き、世界ボクシング協会(WBA)も不可解な採点であることを認め、再戦を決定しました。ドキュメンタリー番組は、この再戦に向けて準備をする村田選手の姿を追ったものでした。

誰も直接口に出して言うことはありません。しかしながら、前の試合で勝っていたのだから今度の試合でも勝って当たり前だという空気が周囲にあふれ、村田選手も再戦の機会を与えられたのだから絶対負けられないと、今まで以上に強いプレッシャーに襲われていました。

ある時、順調に進んでいたはずの練習で体が重く感じられ、思うように動かなくなってしまう。勝てないかもしれないという不安に襲われたのです。村田選手は、いつもの確なアドバイスをくれる父親に悩みを語ります。すると、勝つか負けるかに関係なく練習それ自体に意味があるのだからしっかり練習に励みなさい、との答えが返ってきました。

父親のこの言葉に目を覚まされ、勝敗に関係なく今できる練習に集中することで、やがて村田選手は調子を取り戻し、世界チャンピオンの座についたことはご存じのとおりです。

倫理実践も然りです。目標を達成することにあまりに執着し過ぎたり、目標数値だけが独り歩きをしていくと、実践は目標を達成するための手段となり、「目標の奴隷」となってかえって結果には結びつきにくくなります。さらに悪いことに、結果が出せないのならばと実践を踏みとどまったり、ひいては実践をやめてしまおうということになり、目標それ自体に意味がなくなってしまうのです。

倫理の実践は、実践に励むことそれ自体に意味と価値があることを忘れてはならないのです。日々、真摯に実践に励む、その延長線上に成果という結果が現れて、目標が達成されるのです。大隅先生は夢中になって研究を楽しみました。それが思いもしなかったノーベル賞につながったのです。村田選手は勝敗に関係なく練習に励みました。それが世界王座の奪取をもたらしたのです。

今できることに全力を傾けて実践する。今なさねばならぬことを着実に実践する——これが倫理実践の基本中の基本です。かつての「倫風宏話」で名誉会長は、「(今、この時を生ききる)とは、会創設以来、提唱されてきた実践の基本姿勢」であると説かれました。また、それが、今も昔も変わらぬ実践の要諦である、とも述べておられます。

そこで今月の実践課題です。本年も今月で終わり、新たな年を迎えることになります。この一年の実践が「どうだったのか」を虚心坦懐に振り返り、新しい年に「何を実践すべきか」を考えた上で、具体的な実践目標を設定していただきたいのです。目標は人さままでしよう。それでよいのです。来るべき年は、同じ倫理実践の大道を歩みながらも、お互いの違いや個性を尊重し合う。その上で、独立不羈の心をもった「永遠の樂觀主義者」として、少しでも高みを目指して自分をより善く変えていく。そのような「今、この時を生ききる」実践に精励する年としようではありませんか。